

科目名 (英文表記)	ベンチャー経営 I (企業家精神: Entrepreneurship)		
科目区分	基礎科目	単位数	2 単位
担当教員名	瀬戸 篤		
研究室番号	528	研究室電話番号	27-5306
Eメール・アドレス	<a href="mailto:atseto@res.otaru-uc.ac.jp">atseto@res.otaru-uc.ac.jp</a>		
授業の内容及び方法：次頁以降に記載			
<p>授業の目的：</p> <p><b>目的</b>は、経済発展のエンジンであるベンチャー企業の成長モデルを理解し、新たな事業創造に求められる中核的課題を学ぶことにある。同時に、将来、自らが組織内または組織外で起業する際に欠かせないリーダーとしての資質（教養・見識・勇気・パートナー）を、自己確認する点にある。世の中には、優れた経営資源やあらたなシーズ・技術をもちながらも、めまぐるしく変動する市場経済で活かすことが出来ずに消えてゆく企業や創業者は数知れない。そこで、本講義では、第一部（M1－4）「企業家精神の理論と歴史」、第二部（M5－8）「創業者の理解」の二部を通じて新事業の創出方法論と成長モデルを学ぶ。</p> <p><b>到達目標</b>は、在学中もしくは卒業後に、社内新規事業担当者および支援者、ベンチャー企業の創業者&amp;経営者、二代目経営者(予定者)として新規事業を志向する者、インキュベーター・マネージャー、キャピタリストおよび金融機関におけるベンチャー融資担当者、として活躍する時に困らない実学（教養＋突破力）を意識的に学ぶことにある。</p> <p><b>講義形式</b>は、前半（M1－M5）がテキスト熟読中心、後半（M6－M8）はゲスト講師（創業経営者）を招いての対話を中心となっている。新規事業&amp;創業には信じられないほどの重圧と重責が創業者に課せられる。それゆえ、こうした理論と歴史を学ぶことにすら重圧感や回避心をもつようであれば、その後には万に一つの成功も望むべくないことを創業史が実証している。</p> <p>&lt;企業家精神の体系的理解のために&gt;</p> <p>第一部 企業家精神の理論と歴史</p> <p>M1 企業家精神—理論篇</p> <p>M2 企業家精神—歴史篇</p> <p>M3 企業家精神—現実篇</p> <p>M4 企業家精神—実践篇</p> <p>第二部 創業者理解</p> <p>M5 企業家精神—創業者理解(理論)</p> <p>M6 企業家精神—創業者理解(対話1)</p> <p>M7 企業家精神—創業者理解(対話2)</p> <p>M8 企業家精神—創業者理解(対話3)</p>			

使用教材（\*サテライト書棚にて大半が閲覧可）

M1-4: 瀬戸篤『MBAのための企業家精神講義』（同文館2012）

M5: アニス・ウッズマン『スタートアップ・バイブル』（講談社2014）

最終課題: P・F・ドラッカー『イノベーションと企業家精神—ドラッカー名著集5—』（ダイヤモンド（2007）

（\*注・・・2分冊簡略版『イノベーションと起業家精神』は不可）

**成績評価の方法:** 最終講義終了後3週間以内に、＜A4\*10頁以上の最終レポート＞を提出し、成績評価のウェイトに基づく最終評価を決定する。

評価の要素	ウェイト
出席率	10%
授業への参加度（事例、討論、調査）	10%
ホームワーク（事前課題の提出）	50%
小テストないしクイズ	0%
試験ないしプレゼンテーション（最終課題）	30%

評価に不服のあるものは、教務委員長に申し出ること。

**履修上の注意事項:**

- 試験ないしクイズなどは授業中に行わないが、講義日09:30までの事前課題提出（アップ）が評価の絶対要件である。なお、講義時間までに提出のないものの出席を認めない。
- 講義を欠席した場合、理由の如何を問わず、最終的な成績点数から1/8（二回なら2/8）を機械的に減ずる。
- 課題は、「ワード文書」保存形式で、A4で40文字×40行の11ポイント、マージは上下左右ともに30mm、下部中央にページ番号。さらに9ポイントで右上フッターに二段書きで1段目が「モジュール名・提出課題種類・対象図書ないし講師名」、2段目には「学生番号&氏名」を明記する。さらに提出ファイル名には提出者の氏名を必ずつけること。
- M6-8でゲスト講師（創業CEO、元創業者）を迎えての対話があるので、学部進学者・留学生を含めてビジネスマナー（スーツ又はノーネクタイジャケット着用・時間厳守）に留意されたい。また、M6-8終了後に講師を囲む懇親会をサテライト周辺で実施するので、積極的に参加して名刺交換されたい。（\*「生年・出身県」「社会人直前の出身校・専攻名」を現職名刺の表面空白部に予め手書きしておくこと。現役学生は、OBSの所属名刺（氏名・学年・Eメール）を作成しておくこと）

## 授業の内容及び方法

モジュール 1 第一部 企業家精神—理論篇	
事前準備	<p>指定図書を読み、レジュメ（A4＊4頁）を計1つ作成し、参考ファイルにアップする。レジュメは、(1)それぞれの概要（2頁）、(2)各講で印象に残った箇所1カ所の引用と引用理由（計2カ所）（1頁）、(3)四つを比較した全体所感（1頁）、の3部で構成。採点して講義開始時にコメントを添えてフィードバックする。</p> <p>指定図書： テキスト第1—4講</p>
第 1 時 限	<p>第1講 アダム・スミス博士『国富論』とJ・ワット 第2講 シュンペーター教授『経済発展の理論』</p> <p>グラスゴー大学のアダム・スミス教授は、18世紀後半のスコットランドで勃興しつつあった産業革命の前夜に明るい市場経済を展望し、副学長として大学退官後に古典『国富論』（1776年米国独立宣言の年）を公刊した。本講では、『国富論』で取り扱われた「経済学説史上初の企業家精神理論」について、当時の歴史背景を踏まえて講師がレクチャーする。</p> <p>続いて、20世紀初頭、第一次世界大戦前後の混沌とした欧州にあって、市場経済はマルクスの予言通りに破綻することなく資本主義経済は発展するとの理論を発表した経済学の巨人がシュンペーター教授である。すでに教授は、1912年初版『経済発展の理論』において、イノベーションが停滞する経済の発展エンジンであることを見抜いていた。本講では、人類史上初めての「企業家によるイノベーション理論の誕生」について、当時の歴史背景を踏まえて講師がレクチャーする。</p>
第 2 時 限	<p>第3講 ドラッカー博士『イノベーションと企業家精神』 第4講 経済思想家に見る企業家精神</p> <p>ナチスドイツが第一党となった1930年代に、ドイツへ併合される運命にあった母国オーストリアを捨て、英国経由で米国に亡命したピーター・ドラッカー博士は、20世紀最大の経営学者といわれる。2005年に死去したピーター・ドラッカー博士が1985年に著した『イノベーションと企業家精神』は、シュンペーター教授のイノベーション理論に直滅学び、企業家精神を行動原理として世界ではじめて体系化した最初のマネジメント著作である。</p> <p>本講では、体系化されたドラッカー博士のイノベーションの方法論を、事前課題を前提として講師がレクチャーする。</p> <p>引き続き、第1—3講でアダム・スミス博士、シュンペーター教授、ドラッカー博士の三人から、企業家精神に基づくイノベーション理論について学んだ。本講では、企業家精神理論に関する3人の巨人たちから何を学べるか、事前課題を前提として講師がレクチャーする。</p>
復 習	<p>企業家精神の理論についてノートを作成し、のちの最終課題提出時の手許参考資料とする。</p>

モジュール2 第一部 企業家精神—歴史篇	
事前準備	<p>指定図書を読み、レジュメ（A4＊5頁）を計1つ作成し、参考ファイルにアップする。レジュメは、(1)それぞれの概要（2頁）、(2)各講で印象に残った箇所1カ所の引用と引用理由（計5カ所）（2頁）、(3)五つを比較した全体所感（1頁）、の3部で構成。採点して講義開始時にコメントを添えてフィードバックする。</p> <p>指定図書：テキスト第5－9講</p>
第3時限	<p>第5講 独立開業型ベンチャー「ホンダ」  第6講 スピンアウト型ベンチャー「京セラ」  第7講 スピンオフ型ベンチャー「SONY」</p> <p>本田宗一郎（1906年生まれ）は、敗戦後の1946年（40歳）にホンダの前身となる「本田技研」を浜松市で個人創業した。そして、1973年（67歳）に藤沢副社長と同時に社長を退任するまで、25年間にわたり現在のホンダの技術を創造した。他方、副社長として本田を裏方で支え続けた藤沢武夫（1909年生まれ）は、敗戦後の1948年（39歳）、福島で成功していた製材工場を売却し、本田技研工業株式会社に増資引き受けして経営に参画し、今日のグローバル企業ホンダの経営体制を構築確立した。本講では、以上の二人がパートナーとして歩んだ5年間にわたる戦後ホンダ創造の軌跡について、事前課題を前提として講師がレクチャーする。</p> <p>引き続き、稲盛和夫（1932年生まれ）は、戦後の高度経済成長を目前にした1959年4月（26歳）に勤務先のあった京都において地元エンジェルからの暖かい出資を得て、京都セラミック株式会社（現京セラ（株））を設立した。本講では、その前後から、1986年（54歳）年に会長として退くまでの27年間にわたる京セラの歴史と、起業から大企業へと発展するに至った様々な困難と解決策について、事前課題を前提として講師がレクチャーする。</p> <p>さらに、井深大（1908年生まれ）は、1933年に早稲田大学理工学部を卒業と同時に大学時代の発明を抱いてテクノロジー・ベンチャーに就職した。戦時中は、日本測定器という軍需エレクトロニクスメーカーにおいて世界的に突出した先端技術開発をすすめ、海軍技術研究会でのちの共同経営者となる盛田昭夫海軍技術中尉と出会った。1945年の敗戦後、戦時中に開発された高度な軍用エレクトロニクス技術の民需転換をはかるべく、井深は46年（38歳）に「東京通信工業株式会社」を盛田らと共同設立した。本講では、その前後から、井深が1976年（55歳）に会長として退くまでの30年間のSONY創業史と、起業から大企業へと発展するに至った様々な困難と解決策について、事前課題を前提として講師がレクチャーする。</p>
第4時限	<p>第8講 大学発型ベンチャー「HP」  第9講 創業者に見る企業家精神</p> <p>はじめに、D・パッカード（1912年生まれ）は、1937年8月（25歳）にして、スタンフォード大学の同級生B・ヒューレットと初めての共同事業計画書を書き上げた。卒業後指導教授の推薦に基づき入社したGE社をまもなく退職し、39年1月（27歳）に母校大学院に戻りヒューレットとともにHP社を指導教授の手厚い支援のもので共同創業した。本講では、その前後から1969年（57歳）に米国国防省副長官に任命されるまでの30年間にわたるHP創業史と、起業から大企業へと発展するに至った様々な困難と解決策について、事前課題を前提として講師がレクチャーする。</p> <p>最後に、これまでにとりあげた4社の創業ヒストリから、それぞれのベンチャーを水平比較し、企業家が創業期に出会うであろう&lt;壁&gt;の存在と、それらを突破するときに必要であった&lt;企業家精神&gt;ならびに発現された&lt;イノベーション&gt;について、講師がレクチャーする。</p>
復習	<p>企業家精神の歴史についてノートを作成し、のちの最終課題提出時の手許参考資料とする。</p>

<b>モジュール 3 第一部 企業家精神—現実篇</b>	
<b>事前準備</b>	<p>指定図書を読み、レジュメ（A4＊4頁）を計1つ作成し、参考ファイルにアップする。レジュメは、(1)それぞれの概要（2頁）、(2)各講で印象に残った箇所1カ所の引用と引用理由（計4カ所）（1頁）、(3)四つを比較した全体所感（1頁）、の3部で構成。採点して講義開始時にコメントを添えてフィードバックする。</p> <p>指定図書： テキスト第10-13講</p>
<b>第 5 時 限</b>	<p><b>第10講 ベンチャー・インキュベーションの重要性</b> <b>第11講 スタンフォード大学発ベンチャー</b></p> <p>2004年（平成16年）の国立大学法人化後における国立大学の変貌は劇的であった。それは、1950年代にスタンフォード大学がキャンパスの一部をインダストリアルパークとして企業に貸し出し始めた頃に一致する。半世紀遅れの変化が、我が国大学に訪れた。とくにスタンフォード大学がアメリカ産業経済の中心地であるボストンやシカゴ、ワシントンDCとは遠くかけ離れたカリフォルニアにあったことを考えると、日本国内地域においてもこうした高度なテクノロジーが集積した&lt;地域クラスター&gt;を形成することが困難ではないことを、講師がレクチャーする。</p> <p>引き続き、米国シリコンバレーは、スタンフォード大卒業生2名が企業したHP社成功に始まり、やがて半導体、IT、バイオなどの先端技術分野における&lt;世界標準&gt;を次々と生み出すシリコンバレーへと発展した。そしてシリコンバレーは、日本との従来型産業分野における国際競争に破れ米国を80年代の停滞から救い出した。本講では、西部辺境の地方大学スタンフォード大学が生み出した企業家精神は、シリコンバレーという半導体・IT・バイオに代表される新産業の母となりうることを、講師がレクチャーする。</p>
<b>第 6 時 限</b>	<p><b>第12講 日本の大学発型ベンチャー</b> <b>第13講 地域に見る企業家精神</b></p> <p>産業技術力強化法*が国会決議される半年前の1999年（平成11）4月、国立大学小樽商科大学（現国立大学法人）は、OB会である「社団法人緑丘会（東京池袋サンシャイン60）」の強力な財政支援を受けつつ、国内初のベンチャーならびに中小企業支援組織として「国立小樽商科大学ビジネス創造センター(CBC: Center for Business Creation)」(旧文部省令地域共同研究センター)を設立した。以上の背景について、講師がレクチャーする。</p> <p>以下は、HP生みの親スタンフォード大学F・ターマン教授の言葉である。 「強力な自立した産業を発展させるためには、科学技術の分野で独自の知的資源を築かなければならない。外部から迎え入れた頭脳や借り物のアイデアに頼る産業活動では、年貢をおさめる家臣以上の存在になることは望めず、永久に競争に勝てないことになる。」(アナリー・サクセニアン『現代の二都物語 (Regional Advantage)』pp.51-52) 以上の背景について、講師がレクチャーする。</p>
<b>復 習</b>	<p>スタンフォード大学における企業家精神とは何であったか？についてよく考えてノートを作成して、最終課題提出時の手許参考資料とする。</p>

モジュール 4 第一部 企業家精神—実践篇	
事前準備	<p>指定図書を読み、レジュメ（A4＊3頁）を計1つ作成し、共有ファイルにアップする。レジュメは、(1)それぞれの概要（1頁）、(2)それぞれ印象に残った箇所2カ所の引用と引用理由（計4カ所）（1頁）、(3)全体所感（1頁）、の3部で構成。採点して講義開始時にコメントを添えてフィードバックする。</p> <p>指定図書： テキスト第14－15講</p>
第7時限	<p>第14講 企業家精神が組織を救う 第15講 最終講—企業家精神の実践法</p> <p>企業家精神は、単に新たなベンチャー創業の核のみならず、旧弊に喘ぐ大企業をも救いうる。その実例を米国IBMと日本マツダの復活に学ぶ。そして、こうした企業家精神を平常から自らが実践的に体得するために必要とされる習慣について、講師がレクチャーする。</p>
第8時限	<p>第一部の締めくくりとして、本レクチャーに対する企業家精神に関するコメントを全員に求め、ディスカッションする。</p>
復習	<p>M1－4にかけて学んだ企業家精神の理論と歴史について、あらためて概略をノートでまとめておく。</p>

モジュール 5 第Ⅱ部 企業家精神—創業者理解(理論)	
事前準備	<p>指定図書を読み、レジュメ（A4＊4頁）を計1つ作成し、共有ファイルにアップする。レジュメは、(1)それぞれの概要（1頁）、(2)引用と引用理由3カ所（1頁）、(3)全体を通じた所感（1頁）、の3部で構成。採点して講義開始時にコメントを添えてフィードバックする。</p> <p>指定図書： アニス・ウッズマン『スタートアップ・バイブル』（講談社）</p>
第9時限	<p>(プレゼン)事前課題を音読する</p> <p>課題図書について、事前課題を評価優秀者がプレゼンする。</p>
第10時限	<p>(ディスカッション:全員)求められる創業者の役割</p> <p>上記内容について、全員でディスカッションする。</p>
復習	<p>両テキストを読んで、(1)起業の持つ意味、(2)起業を支えてくれる環境、(3)さらに起業後も発展を続けるために必要な要素、についてよく考えてノートを作成し、最終課題提出時の手許参考資料とする。</p>

<b>モジュール 6</b>		<b>第二部 企業家精神—創業者理解(対話1)</b> <b>首都圏におけるベンチャー創業経緯と現在のビジネス</b>
<b>事前準備</b>	株式会社ナレッジコンスタント（本社東京）に関するインターネット等による情報収集を行う。 事前提出は <u>ない</u> 。	
<b>第11時限</b>	<b>(レクチャー:現役創業者)大企業からなぜスピンアウトしたか、その背景とその後のビジネス展開</b>	
	10数年勤務した大手総合商社をスピンアウトして、自宅にて一人から創業したIT系ベンチャー「株式会社バストソリューション（現ナレッジコンスタント）」（本社東京）のCEOを招き、恵まれた商社マンを取って辞しベンチャー創業に至った背景と経緯、そして創業時に直面した様々な問題とその解決策について、創業者&CEOから直接 <u>レクチャー</u> を受ける。	
<b>第12時限</b>	<b>(ディベート:全員)創業の3要素と今後の発展戦略</b>	
	レクチャーで感じた疑問について、直接創業者に質問をぶつけながら <u>ディベート</u> する。 彼ら創業者は、サラリーマン時代に創業の3要素たる(a)パートナー、(b)エンジェル、(c)メンター、をどのようにして獲得したのであるか？そこでは、人間的な力と資本の力が発生しているが、それらはどのように結びつきベンチャー創造の推進力となったのか、そして実際に創業し経営を安定軌道に載せることに成功したのであるか？さらにまた、今後どのような発展戦略を創業者は構想しているのだろうか？全員で創業者とともに <u>ディスカッション</u> する。	
<b>復習</b>	事後課題:M6ゲスト講師と内容に関してレポート（A4*2頁）を計1つ作成し、1週間後木曜日の09:30までに共有ファイルにアップする。採点して講義開始毎にコメントを添えてフィードバックする。レジュメは、(1)受講したのち判明した事前課題とのギャップ（1頁）、(2)講師とのディスカッションを通じた所感（1頁）、の2部で構成。また、採点后レポートは講師本人に送付する。	
<b>モジュール 7</b>		<b>第二部 企業家精神—創業者理解(対話2)</b> <b>札幌におけるベンチャー創業経緯と現在のビジネス</b>
<b>事前準備</b>	株式会社北海道宝島旅行社（本社札幌）に関するインターネット等による情報収集を行う。事前提出は <u>ない</u> 。	
<b>第13時限</b>	<b>(レクチャー:現役創業者)大企業からなぜスピンアウトしたか、その背景とその後のビジネス展開</b>	
	10数年勤務したリクルートをスピンアウトして、Uターンして元部下と二人で創業したインバウンド旅行ベンチャー「株式会社北海道宝島旅行社」（本社札幌）のCEOを招き、ダイナミックな成長を続けるリクルートを取って辞しベンチャー創業に至った背景と経緯、そして創業時に直面した様々な問題とその解決策について、創業者&CEOから直接 <u>レクチャー</u> を受ける。	
<b>第14時限</b>	<b>(ディベート:全員)創業の3要素と今後の発展戦略</b>	
	レクチャーで感じた疑問について、直接創業者に質問をぶつけながら <u>ディベート</u> する。 彼ら創業者は、サラリーマン時代に創業の3要素たる(a)パートナー、(b)エンジェル、(c)メンター、をどのようにして獲得したのであるか？そこでは、人間的な力と資本の力が発生しているが、それらはどのように結びつきベンチャー創造の推進力となったのか、そして実際に創業し経営を安定軌道に載せることに成功したのであるか？さらにまた、今後どのような発展戦略を創業者は構想しているのだろうか？全員で創業者とともに <u>ディスカッション</u> する。	
<b>復習</b>	事後課題:M7ゲスト講師と内容に関してレポート（A4*2頁）を計1つ作成し、1週間後木曜日の09:30までに共有ファイルにアップする。採点して講義開始毎にコメントを添えてフィードバックする。レジュメは、(1)受講したのち判明した事前課題とのギャップ（1頁）、(2)講師とのディスカッションを通じた所感（1頁）、の2部で構成。また、採点后レポートは講師本人に送付する。	

モジュール 8		第二部 企業家精神—創業者理解(対話3) 札幌におけるベンチャー創業経緯と現在のビジネス
事前準備	株式会社シーズラボ（本社札幌）に関するインターネット等による情報収集を行う。事前提出はない。	
第 1 時 限	<p>(レクチャー: 現役創業者) 大企業からなぜスピンアウトしたか、その背景とその後のビジネス展開と、EXITの結論</p> <p>17年勤務した首都圏大手ソフトウェア企業をスピンアウトして、北海道にUターンして仲間数名と創業したIT系ベンチャー「株式会社シーズラボ」（本社札幌）のCEOを招き、Uターンの背景と創業時の困難と解決策、道外市場へのアクセス確保と以前勤務した大手企業との関係、そして昨年迎えたEXITの結論について、創業者&amp;CEOから直接レクチャーを受ける。</p>	
第 2 時 限	創業者との直接対話（＝コンパ）	
復 習	<p>(A) 事後課題: M8ゲスト講師と内容に関してレポート（A4*2頁）を計1つ作成し、1週間後木曜日の09:30までに共有ファイルにアップする。採点して講義開始時にコメントを添えてフィードバックする。レジュメは、(1)受講したのち判明した事前課題とのギャップ（1頁）、(2)講師とのディスカッションを通じた所感（1頁）、の2部で構成。また、採点後レポートは講師本人に送付する。</p> <p>(B) 最終課題: P・ドラッカー『イノベーションと企業家精神—ドラッカー名著集5—』ダイヤモンド（2007）を読んだ上で、以下の構成で&lt;最終レポート&gt;を作成する。</p> <p>&lt;内容と形式&gt;</p> <p>(1) 同書概要*1頁、(2) 同書で印象に残った引用と引用理由を計3カ所とその理由*1頁、(3) 同書所感*1頁、(4) 講義全体でもっとも印象を受けたモジュール1つとその理由*1頁、(5) 講義全体を通じた所感*2頁、全体で5部構成のレポート（＝A4×6頁）を作成する。提出期限は講義終了2週間以内（2週間目当日の23:59まで）。担当教員の個人アドレス宛</p> <p>&lt;atseto@res.otaru-uc.ac.jp&gt;に&lt;word文章形式&gt;でファイル添付メールを直接送信し、受領確認を講師からメール返信で得ること。なお、以上の期限・内容・形式を無視したレポートについては&lt;採点対象外&gt;とする。</p>	